北アルプス　黒薙川　北又谷

2011 年8月 12 日～8月 15 日

メンバー：L田中・斎藤・志満

地形図：小川温泉

昨年、計画をたてた北又谷だが悪天候の為、転進となった。日本屈指の秀渓と言われる北又谷、その美しさを今年こそこの目で見てみたい。北又谷は果たして私達を歓迎してくれるだろうか・・・・。

8／12　　津久井から 6 時間かけて、入山口である小川温泉無料駐車場に到着。翌朝、早々からアブの攻撃にあう。この先思いられるがお岩さんの眼になるのだけは勘弁してほしい。予約していたタクシーに乗り込みいざ！北又小屋へ。北又谷入渓には、越道峠から山越えをして入渓がほとんどだが、今回は記録があまりない北又小屋のヘリポート広場から尾根越えをして支流から本谷へ入渓するという短時間で楽そうなコースを選んでみたのだが、実際は尾根に上がるのに一苦労をし支流への下降はブッシュを掴みながらの下降、4回の懸垂、支流に入ってからも長くて懸垂ありで本流に辿り着くのに3時間40分もかかってしまった。あまり標高をあげず早めに下降をしていればもう少し早く沢床に降りられたのかも知れないがそれでも苦労は多くこの入渓ルートはお勧めしない。北又谷へ降り立ったのはすでに昼近く。出だし早々疲労感 UP。出合から40分程で滝が現れる。V 型の切れ込みを持ち、これが秘境北又谷のゲートと言われる魚止め滝↓

一時期、落差が 1m 程度まで低くなってしまったと聞いたが今は 3m くらいの高さまで回復しており、釜が大きく水量は豊富で迫力がある。田中さんがリード。一泳ぎをし左岸のルンゼを登りランニングビレーを取ってから絶妙なトラバースで落ち口へ（トラバース間2ヶ残置ハーケンあり）ここでピッチをきる。ここからは対岸に飛び降りるのだが、これがまた恐怖の場となる。田中さんが空身でロープをたぐって飛び込むが、流れが強く更に着地場が砂地で踏ん張りがきかず足をとられて水流に流される。とっさに2人でロープを引き寄せ危機一髪。たぐっていたロープを田中さんが離していたら完全に瀑芯にのまれていた。田中さんはもちろんだがビレーをしている私達もかなりの冷や汗もの。もう1度チャレンジするがまた足をとられ振り出しに戻る。私達のいる落ち口から少しトラバった所に残置ハーケンがありランニングビレーを取って、へつろうとするけどヌメヌメして行くことは出来ず。やはり対岸に飛び移るしか手段がない。そこから3度目のチャレンジで飛び込み今度は成功した。皆、歓声と安堵の笑顔☆ロープでザックを渡し空身で飛び込むがセカンドでも緊張した。この魚止め越えに 2 時間を要し、その後は渡渉にへつりを繰り返し大釜淵についた時には16：40分。越える気力も時間もなく左岸ルンゼを高巻くことにする。時折降る強い雨の中、急斜面をブッシュを掴みながら1時間程登ったところで平坦な尾根に出た。すでに18時半。激しい雨と疲労感、たとえ沢床へ降りてもしばらくテンバがない事から今日はここでビバークと決め込んだ。テントを張り水は各自ペットボトルに入っていた少ない水を飲み、行動食で腹を足し就寝となる。

／12（1 日目）

：25北又小屋～7：50出発～9：20尾根下降（懸垂4回）～10:30 枝沢床～11:30 北又谷～1：50発～12:40 魚止の滝（終了 14:40）～16:40大釜～巻き（尾根上18：45テンバ到着）

8／13　　雨はあがったようだ。緊急ビバークの割には快適だった。行動食をほお張りいざ！出発。ブッシュに掴まりながら急斜面を下降する。最後は50m懸垂で恵降沢へ。少し高巻き過ぎたようだ。本谷へ戻ると又衛門滝。時間は7：40分。朝一から水に浸かるのも嫌なので左岸を巻く事に。踏ん張りの利かない足場と垂直に近い急斜面、ブッシュを掴み、身体と重い荷物を持ち上げながら木登り状態。昨日の疲れも重なり腕が極度の疲労感で完全にﾊﾟﾝﾌﾟしている。かといって手を離してしまえば大怪我では済まない。無我夢中でブッシュを掴み、時には枝を肩から抱え込み越えていく（沢にも腕の筋力 UP 必須です）

又右衛門谷で一度降りて登り返している記録があったので、私達は降りずに引き続き巻くが高巻き過ぎたのか下降に7回の懸垂を強いられた。懸垂途中、斎藤さんがザイルをセットしていた時にスズメバチに腕を7-8所くらい刺され、直後は冷や汗と意識がもうろうとしてあまり良い状況ではなかったが、沢床に降りるまでは耐えてもらうしかなかった（その後は、痛みが激しかったけど翌日には回復）
朝から高巻きに終始し 5 時間の時間を費やしてカキオリ谷手前、長淵上部の辺りに降り立つ。やれやれ・・・・なんていう沢だ。ここからはしばらく河原となり、いつもならつまらない河原歩きとなるものだが、今はとっても新鮮に感じてとても癒される。

↑滝の中に斎藤氏　見えますか？
＜ミズカミ谷 12m 滝を浴び修行中＞

S 字状に屈曲した沢を左岸沿いにへつり進むと中瀞というゴルジュに入る。ここを抜けるとゴーロ帯となり右岸から白金沢、ここから 10 分程歩いた右岸にほどよいテンバスペースを見つけ今夜の宿となる。昨夜はろくに食せなかった分、田中シェフの肉野菜たっぷりのシチューをがっつり食べてスタミナをつける事が出来た。岩魚は刺身にアルミホイル焼き、岩魚の砂糖焼（田中さんが塩と間違えてふってしまった。味は？・・・美味しくなかった）

＜中瀞を行く＞

８／１３（2 日目）
６：３０テンバ発～７：３０恵振沢～７：４０又右衛門滝～巻き～１１：２０沢床～13:45ミズカミ谷～14:40 白金沢～テンバ16:00

＜我が釣り師達の笑顔＞

8／14　朝の身支度をしていると単独者が抜けていった。こんな恐ろしい沢に単独で入るなんて、世の中にはすごい人が居るものだ。テンバを出発して、すぐに現れたのが迫力のある白金の滝。釜の水流が強くとても取りつけそうもない。左岸を巻き 40 分くらいで漏斗谷へ。漏斗谷はかなりの水量で、この沢を分けると、本流の水量はぐっと減り、上部の長持淵は楽しく通過することができた。3段の滝はあまりハッキリとしない3段だが、右岸のリッジからルンゼを登って高巻く。ここはザイルを出す。ズルズルのスラブや、垂直に近い木のぼりがあって結構悪い巻きであった。最後はガレ斜面を40m 懸垂で3段上部の落ち口へ。大きい沢ならではの巻きの悪さを身に染みて感じる。しばらく花崗岩の白く美しい景観が続いた所で、突如スノーブリッチが現れる。手前は崩れていて大きな雪のブロックが散乱していた。ブロックの上を歩き、ブリッチは雪渓すれすれの泥壁をへつって越える。雪渓越えのこの異様な緊張感や重苦しさは他にはないもので、あまり味わいたくないと思うのは皆同じだろう。

＜右岸、雪渓すれすれの脆い岩壁をへつる　ここ↑＞

3m 滝の右壁を快適な？フリークライミングで越えるとすぐに黒岩谷出合となり、その先が10ｍの猿ケ滝。少し時間にゆとりがあるので竿を垂らしてみるが・・・・？

＜サルガ滝・・・ヒットなし＞

猿ヶ滝は本流にかかる滝では一番高さはあるが、左岸側から容易に巻くことができる。淵と

小滝を越え、間もなく吹沢谷出合でテンバ予定地だ。本来なら2泊目に泊まる場所だったが、まる１日の遅れとなる。今宵、浅い水の流れの静かで快適な宿からは水面に反射する満月の明かりがとても美しく斎藤さんと 2 人黄昏れていた。が・・・・その背面からはいびき。誰！？

8／14（3 日目）
8：00テンバ発～8：20白金沢～9：00漏斗沢～13：40黒岩沢～14：10サルガ滝～15：30吹沢谷出合（テンバ）

8／15　ここからは北又谷と別れ、吹沢谷へ入る。河原を歩きからゴーロ帯と変化し1時間半くらいで二俣。ここは右へ進路を取る。次第に傾斜が出てくるけれど、特に難しいところはなく、相又谷のコルを目指す。沢が狭くなり源流の雰囲気が強まってくると6mの滝が現れる。一見安易に登れそうな感じではあったが岩が脆く、掴んだ岩がほとんど崩れていく。空身になって斎藤さんがリードした。

源頭は頭が埋まってしまう程の笹藪ではあったがそれほど長くなくて、コルより少し南よりの踏み後に出た。登山道ではないけれどしっかりとした山道となっていて越道峠に続いているのだろう。この道を歩いて下山との話もあがったけれど、峠からどうするのか・・という話になり当初の予定通り相又谷へ下降する事にした。この暑い中、稜線歩きはとてつもなく苦しい思いをしていただろう。やっぱり夏は下降も沢に限ります。コルから二俣まで一気に標高を下げる。途中、3段の滝があり2ピッチの懸垂、等高線が狭い割には、ここ意外はザイルを使うことなく快適に降りることが出来た。二俣までくると傾斜は緩むが次々と現れる堤防が景観を損ない、堤防越えるのに何度か懸垂を強いられる。標高490m、上部に林道があり泥壁の急斜面を登って林道に上がる。一気にアブが増え、体中まとわりついている。この 4 日間小岩さんにならないよう最善の注意を払ってきたのに、ここで刺される訳にはいかない。車に乗るまで気を抜くんじゃない！と変な気合いを入れ小川温泉に向かって歩き出す。

8／15（4 日目）
7：30テンバ発～9：15二俣～11：40乗越し～16：30林道（480m）～17：20相ノ又トンネル～17：55小川温泉Ｐ

＊今年の夏もハード山行となった。
増水していなければもう少し水流通しに行けてもっと楽しい遡行となったとは思うけれど、こんな条件の中、予備日を使ったものの完全遡行が出来たのは力量のあるメンバーのおかげ。ハードだったけれど充実感のある山行となり満腹と相成りました。思い出の残る渓となるでしょう。

＜　↑　だぁ～れだ！？？　＞